

はじめに

ひとつのまちが消えた。あるいは消されたと言った方が正確かもしれない。ともかく、かつて確かに存在していたまちが、そっくり姿を消したのである。それは広島市の基町の中に存在した「相生通り」というまちである。

広島デルタの中心部、中区に基町と呼ばれる一角がある。広島城や県庁、旧広島市民球場（広島カープの本拠地）のあるところと言えば、お分かりかもしれない。しかし、かつての「相生通り」のまちのことを知っている人はどれくらいいるだろうか。ましてや、実体としてすでになくなっていくのであるから、今後ますます知られざる存在となることも考えられる（口絵写真K-1）。

一方、基町は高層アパートが林立することで知られている。広島デルタのなかで、際立つ存在であるこの基町高層アパートは、基町再開発という事業の一環で建設されたものである（口絵写真K-6・7）。

「基町地区の改良なくして広島は戦後は終わらない」と繰り返し表現されたように、基町再開発は広島にとって長年の懸案であった。この事業は1978（昭和53）年にひとまず終了し、同年10月11日には、「基町地区再開発事業完成記念式」が挙行され、10年間にわたる大事業に終止符が打たれた。この再開発によってギッシリと建て込んでいたバラック住宅などの建物が取り払われ、見違えるような基町は生まれたのである。

取り払われた住宅地は、公的な住宅として建てられたものもあれば、不法に建てられたものもあった。太田川の支流で、本川と元安川に分岐する付近から上流の東岸は堤防があり、さらにその外側（川側）に比較的広い河川敷があった。河川用語で堤塘敷と言うが、そこに相生通りと呼ばれるまちがあった。その相生通りこそ、いわば不法に建てられた一大住宅群（住宅以外の施設も含む）であったのだ。

相生通りは「原爆スラム」とも呼ばれたことがあった。その呼称は、マスコミや行政側がそれぞれの思惑で使用したとも言われており、多分に拡大解釈した言葉であった。とはいえ、その比率の大小の問題はあるものの、相生通りに被爆者が居住していたことは紛れもない事実であった。

その相生通りはまた、戦後の広島デルタで差別と貧困にあえぎながら、生き抜いてきたという表現も可能な場所であった。そのことにこだわって相生通りと取り組み、作品として表現した作家たちもいた。大田洋子は、その『夕風の街と人と』という作品において、戦後の、特に1953（昭和28）年頃の基町を描いたのであった。山代巴らの「広島研究会」は、被爆後20年の広島の実態を捉えようとして、様々な面からアプローチを試みたが、そのなかで文沢隆一が相生通りに、ある時期住み込んで一文を草してもいる（第3章3の「共同設備の苦労」参照）。

さて、再開発事業が開始されて間もない1970（昭和45）年に、相生通りの調査を実施したメンバーがいた。それから約10年の後に、その調査を担った主要メンバーに新たな参加者を加えて結成した「基町相生通り研究グループ」が、70年調査のその後を追跡する調査を実施した。

本書は、相生通りの発生から消滅までを、可能な限り記録しようとしてまとめたものである。1970（昭和45）年夏から秋にかけて行った、撤去直前の「基町／相生通り（通称原爆スラム）実態調査」と、その9年後の1979（昭和54）年に、かつての「基町／相生通り」に居住した人たちに対して行った追跡調査の2つをもとに、まとめられている。そして調査後、半世紀近い時を経て振り返り、

消滅したまちの意味を改めて問い直すとともに、今日の思いをまとめたものである。それは同時に、次の時代に伝えていきたいという思いからでもある。

とはいえ、本書が社会的にマイナス効果を果たすことを懸念する。相生通りが注目を浴びたのは、やはり広島の中なかで特異な存在であったからである。その事実を明らかにすることが、新たな社会的悪影響を及ぼすならば、私たちの作業は報われない。私たち自身もそういった状況を、興味半分で眺めることは許されないことと考える。仮に差別が存在することを記述する時、決して差別を許容するものではないことを断りたい。まして差別が再生産されることになれば、私たちの意図は無残にも踏みにじられる。

本書が、広島が消えたまちの一つの証になり、さらには広島や世界の今後のありようにも何がしかの参考になれば幸せである。

1981年 記す(一部加筆)

追跡調査(1979年)から10年後、ベルリンの壁が壊されて冷戦構造は一変し、2001年のアメリカ・ツインタワーへのテロに象徴されるように、世界はさらに多極化へと向かった。

1995年と2011年の2つの大震災(阪神淡路・東日本)は、ひとたび破壊された街の復興の難しさを、特に原発事故からの復興の陰しさを教えてくれた。

こうした動きの中であって、被爆後の30年間、太田川河岸に存在し続けた相生通りの多くの人たちは高層アパートへ移り、新たな生活がスタートして一世代の時は過ぎた。今、世界はINF(中距離核戦力)全廃条約の破棄や米中貿易戦争に象徴されるように疑心暗鬼に満ち、混迷が増幅しつつある。遠い回り道のようにはあるが、ここで再び相生通りが存在した意味を振り返り、これからの基町・広島、さらにヒロシマのあり方を探る一助とはできないか。この50年、様々なかたちで報告してきたことをまとめ、ここに本書とするものである。

2019年 記す 石丸紀興 千葉桂司 矢野正和 山下和也